

7000級のアンナプルナ連峰が白銀の輝きを放つ。ネパールの観光都市・ポカラ。町の一角にある「子ども教室」で、ディル・バハドル・プンマガル君(16)は、劇の練習をしていた。一緒にいる仲間も、全員がストリートチルドレンだ。

台本はディル君が考えた。父の暴力で家を出た男児が、町でストリートチルドレンの少年グループに会う。ごみの中からプラスチックを拾う生活に入るが、手の傷から破傷風になり死ぬ、というストーリー。

# 明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

その筋書きは、自分自身の経歴に重なる。ディル君は、7歳で母を、その3カ月後に父を病気で亡くし、おじに引き取られた。皿洗いなどの家事をする毎日。食事の時は「たくさん食べるな」といじめられ、1年後に逃げ出した。住み込みの

## 少年が訴える劇で体験した悲惨な



仕事を見つけて3年間働くが、報酬は15ルピー(1ルピーは約2円)くれただけ。その後はごみを拾って軒下で寝る生活だった。

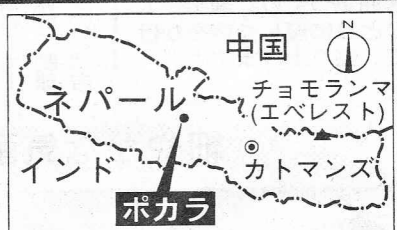
子ども教室には、今年から通っている。劇で死ぬことになる主人公になるつもりはない。勉強して、鉄細工の職人になるのが夢だ。

「ストリートチルドレンが悲惨なことを訴えたいんだよ」

ポカラ市から北に車で2時間ほど行った山村に、ベム・クマリ・デュンガ

光を背に無心に遊ぶ子どもたち。次世代を担う彼らの「明日」が幸せに満ちあふれるように……

ネパール・ポカラで



来た。ところが、夫には別の「妻」がいた。祈とう師が夫とその女性の手相を見て「結婚したら子どもが生まれない」と占ったため、夫は形だけの妻を求めたのだ。9年前、そんな生活が嫌になり、近くにいた姉の家に移った。当然、子どもはいない。

委員長になった経緯を、ベムさんは説明した。「あなたは暇だろう、とみんなに言われたんです。しかし、引き受けた。「子ども

は残せなかった。でも、この仕事は私が死んだ後も残る」。ベムさんの指導で、村の病気は減った。

ディル君もベムさんも、格闘している。困難であっても、次世代に何かを残したい。そんな夢と希望を強く感じた。この国の「貧困撲滅」を実現するのは、こんな小さな力からではないか。

私たちはそれを、支えていきたい。

おわり

文・連見 新也

写真・懸尾 公治

● 病院建設にご協力を  
「目に見える援助」を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関などへの寄金に加え、ネパール現地を進められている子ども病院建設計画にも協力します。

救援金は、下記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)

夢と希望……次世代に何かを残したい